

## ■ 清流劇場「賢者ナータン」

宗教・宗派対立によるテロと報復の連鎖が激化する。本来人を救うはずの神、宗教が、何故虐殺や戦争を招くのか。現代日本にも通じるテーマとしてわかりやすくドラマ化した、清流劇場の「賢者ナータン」(10日、伊丹市のアイホールにて所見)。ドイツの思想家レッシング原作(1779年作)、田中孝弥構成・演出。

12世紀末のエルサレム。ユダヤ教徒のナータン(林英世)は、キリスト教徒の孤児・レヒヤ(泉希衣子)を我が子として育てる。大司教(得田晃子)は、子供を無理に改宗させたとして激昂する。

自分の宗教だけが正義で、他は認めない不寛容な人々を描く本作。開幕時に空爆音が



ナータン(林英世<sup>左</sup>)は娘を救ってくれた神殿騎士と友情を結ぶ—写真 古都 栄二

## 宗教対立通し反戦訴え

響き、背景にシリア内戦の映像を常に映し出す。廃墟の中、逃げ惑う子供達。宗教対立の矛盾が招く、悲惨な戦争の理不尽を実感させ、さらに私達も日常、異なる価値観を否定し、優劣をつけていないかと、意識が呼び覚まされる。

深刻なテーマだが、俳優達は人形のようなカリカチュアした動きを見せる。人形劇を見るような虚構性と寓話性。男女逆転の配役も功を奏し、生々しさが和らぎ、問題の本質が理解しやすい舞台だ。

ナータンはかつてキリスト教徒に妻子を虐殺され、キリスト教を憎悪した。だが葛藤の末、愛と寛容を説く神の教えを行動に移し、異教徒の子供を引き取ったのだ。レヒヤを火事から救ったキリスト教徒と友情を結び、またレヒヤがイスラム国家の温厚な君主の姪と判明、平穏が訪れる。

幸福な結末だが、最後に空爆音が流れ、私達が未解決の問題の只中ただなかにいることを喚起した。ドイツ古典劇の名作に現代の諸問題の根源を見出した、反戦の劇だった。

(大阪芸大短期大学部准教授